

# トルストイ翁の非戦論を評す

幸徳秋水

1904 年

一

読者は本紙前号に訳載せるトルストイ翁の白露戦争論を讀で、如何の感を生ぜしや、夫れ如此きの長編が、今年七十七歳の老人の筆に成れりということのみを以てするも、其精力の比なき、既に吾人の驚嘆を値するに餘あるに非ずや、況んや其勁健流麗の文（吾人の訳文の拙劣なる其筆致を伝うる能わざるは深く遺憾とする所也）を以て崇高雄大の想を行ふ、言言肺腑より出で、句々皆な心血、万丈の光彩陸離として火の如く、人をして起舞せしめずんば已まざるの概あるをや、吾人は之を讀で、殆ど古代の聖賢若くば豫言者の声を聴くの思いありき。

二

而して吾人が特に本論に於て、感嘆崇敬措く能わざる所の者は、彼が戦時に於ける一般社会の心的及び物的情状を觀察評論して、露国一億三千万人、日本四千五百万人の、曾て言うこと能わざる所を直言し、決して写す能わざる所を直写して、寸毫も忌憚する所なきに在り。

見よ、彼の少年皇帝の昏迷、学者の曲学、外交家の譎詐、宗教家の墮落、新聞記者の煽動、投機師の營利、不幸なる多数労働者の疾痛慘憺、而して総て是等戦争の害毒罪惡より生ずる社会全体の危険を叙説するに於て、何者か能く翁の如く其眼光の精緻なる者ある乎、其筆鋒の鋭利なる者ある乎、何者か描き得て爾く有力なる者ある乎、爾く明白なる者ある乎、爾く大胆なる者ある乎、何者か爾く真に迫り神に入ることを得る者ある乎、然り、是れ豈に吾人の前に一幅戦時社会の活画図を展開せる者に非ずや。

而して此活画図や、是れ現時の白露両国の社会に於ける事実也、然り大事実也、較著なる大事実也、如何に戦争を讚美し感嘆し、主張し、助成する者と雖も、一面に於ては決して是等の罪惡、害毒、危険の存在することを得可らず、何となれば是れ彼等が日夕實際に目睹し居れる所なれば也、但だ彼等従来其好戦的狂熱の爲めに、強て自ら良心を麻痺せしめ是等の事実を看過し、黙視し、甚だしきは則ち之を隱蔽塗抹せんことを力めたりと雖も而も今や翁の如此く明白、有力、大胆なる描写指摘に逢う、彼等は猶お豁然として自覺せざることを得る乎、赧然として悔改せざることを得る乎。

吾人は翁の大論文が、此点に於て、実に世間多数の麻痺せる良心に対して、絶好の注射剤たり得べきを信ず、否注射剤たらしむべきを希う、吾人が本篇を訳述して江湖に薦し所以の微意実に此に外ならず。

三

然共吾人を以て、全然トルストイ翁の所説に雷同盲従する者となさば、是大なる誤解也、吾人は元より翁が、戦争の罪惡、害毒及之より生ずる一般社会の危険を切言するを見て感嘆崇敬を禁ぜずと雖も、而も将来如何にして此罪惡、害毒、危険を救治防遏すべきかの問題に至ては、吾人は不幸にして翁と所見を異にする者也。

翁が戦争の起因と其救治の方法を述ぶるや、滔々数千言、議論の巧、措辞の妙を極むと雖も、要は、戦争の起因は人々真個の宗教を喪失せるが爲なり、故に之が救治や、人々をして自ら悔改めて神意に従わしむべし、即ち隣人を愛し己の欲する所を人に施さしむべしというに在る者の如し、単に如此きに過ぎずとせば、吾人豈に失望せざるを得んや、何となれば、是れ恰も「如何にして富むべきや」という問題に対して、「金を得るに在り」と答うるに均しければ也、是れ現時の問題を解決し得るの答弁にあらずして、唯だ問題を以て問題に答うる者に非ずや、吾人は此点に於て、翁が一關未だ透し得ざる者あるを惜む。

吾人は必しも宗教を無用とし有害とするものに非ず、然れども人はパンのみにて生きる能わざるが如く、又聖書のみにて生きる者に非ず、靈なき人が死なるが如く、肉なき人も亦死なり、夫れ一飯にだも餐くこと能わざる者、安んぞ道を聞くに違まらんや、人は尽く夷齊に非ず、単に「悔改めよ」と叫ぶこと、幾千万年なるも、若し其生活の状態を変じて衣食を足らしむるに非ずんば、其相喰む相搏つ、依然として今日の如けんのみ。

吾人社会主義者が非戦論を唱うるや、其救治の方法目的如此く茫漠たる者に非ず、吾人は此点に於て一貫の論理を有し、實際の企画を有す、吾人の所見に依れば今の国際戦争は、トルストイ翁の言えるが如く、単に人々が耶蘇の教義を忘却せるが爲めにあらずして、実に列国經濟的競争の激甚なるに在り、而して列国經濟的競争の激甚なるは、現時の社会組織が資本家制度を以て其基礎となすに在り、（四月三日發行本紙第二十一号社説「列国競争の真相」参照）、故に将来国際間の戦争を絶滅して其惨害を避けんと欲せば、現時の資本家制度を転覆して、社会主義的制度を以て之に代えざる可ら

ず、社会主義的制度一たび確立して、万民平等に其生を逐ぐるに至らば、彼等は何を苦しんで悲惨なる戦争を催起するの要あらんや。

之を要するにトルストイ翁は、戦争の原因を以て個人の墮落に帰す、故に悔改めよと教えて之を救わんと欲す、吾人社会主義者は、戦争の原因を以て経済的競争に帰す、故に経済的競争を廃して之を防遏せんと欲す、是吾人が全然翁に服するを得ざる所以也。

四

吾人の翁と所見を異にする如此し、而も翁の言々実に肺腑に出で、句々皆な心血直言忌まず、党議憚らず、露国皇帝も亦一指を加うる能わずして、其所論は直ちに電報を以て万国に報道せらる、翁も亦一代の偉人高士なる哉。

(平民新聞第四十号)

無政府主義図書館 (Japanese)

幸徳秋水  
トルストイ翁の非戦論を評す  
1904年

<https://www.ne.jp/asahi/anarchy/anarchy/data/koutoku02.html#06> (2024年3月15日検索)

[ja.theanarchistlibrary.org](https://ja.theanarchistlibrary.org)